師の説になづまざること

古文／誰でも古典塾

名前（　　）　日づけ（　／　）　できた数（　／28）

使い方　本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。**この文章の山は、尊敬の「られ」、禁止の「な〜そ」、係り結び「なむ〜し」、反語「などか〜む」、不可能「え〜ず」、そして古語「わろし」「あきらむ」**です。この確認テストは、解説記事と同じく文章の前半（第一段・第二段）を扱います。

内容＝作者（本居宣長）は、古い書物を説くとき、師の賀茂真淵の説と違うことを言い、師の説のよくない点をはっきり指摘することも多い。それを「あってはならない」と思う人も多いようだが、実はそれこそ師の考えで、師はいつも「後によい考えが出たら、師の説と違っても遠慮するな」と教えていた。作者はこれを尊い教えだと言う。さらに、古代の研究は一人二人の力ではやりつくせず、すぐれた人の説にも誤りはまじるし、自分では完全だと思った説にも、思いがけず別の人のよりよい考えが出てくるものだ、と述べる。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

おのれ古典（いにしへぶみ）を説くに、師の説と①たがへること多く、師の説の②わろきことあるをば、③わきまへ言ふことも多かるを、④いとあるまじきことと思ふ人⑤多かんめれど、⑥これすなはちわが師の心にて、⑦常に教へられしは、「⑧のちによき考への出で来（き）たらむには、必ずしも師の説にたがふとて、なはばかりそ。」⑨となむ、教へられし。⑩こはいと貴（たふと）き教へにて、わが師の⑪世にすぐれ給へる一つなり。おほかた、いにしへを考ふること、⑫さらに一人二人の力もて、ことごとくあきらめ尽くすべくもあらず。また、よき人の説ならんからに、多くの中には、⑬誤りもなどかなからむ。必ずわろきことも⑭まじらではえあらず。そのおのが心には、今はいにしへの心ことごとく明らかなり、これをおきては、あるべくもあらずと、思ひ定めたることも、思ひのほかに、⑮また人のことなるよき考へも出で来（く）るわざなり。

語注　おのれ＝わたくし。作者の本居宣長自身。古典（いにしへぶみ）＝古い時代の書物。師＝賀茂真淵（かものまぶち）。宣長の学問の先生。すなはち＝そのまま。とりもなおさず。考へ＝研究して得た説。考え。おほかた＝だいたい。総じて。いにしへを考ふ＝古代のことを研究する。もて＝「もちて（もって）」がつまった形。〜で。ならんからに＝〜であるからといって。おのが心＝その説を立てた人自身の心。これをおきては＝この説をさしおいては。わざ＝こと。もの。

※本によっては「多かめれど」「出で来たらんには」「なからん」と書く。

師の説になづまざること

A　語句の意味（1〜6）

（1）②「わろきことあるをば」の「わろし」の意味を書け。

（2）③「わきまへ言ふ」の「わきまふ」の意味を書け。

（3）⑧の「なはばかりそ」の「はばかる」の意味を書け。

（4）⑪「世にすぐれ給へる一つなり」の「世に」の意味を書け。

（5）⑫「さらに一人二人の力もて」の「さらに」は、下の打消と呼応している。「さらに〜ず」の意味を書け。

（6）⑫の「あきらめ尽くす」の「あきらむ」の意味を書け。

B　文法（7〜13）

（7）①「たがへること多く」の「る」の文法的意味と活用形を書け。

（8）④「いとあるまじきこと」の「まじき」の文法的意味を書け。

（9）⑤「多かんめれど」は、もとの形が音便になったものである。もとの形と音便の種類、「めり」の文法的意味を書け。

（10）⑦「常に教へられしは」の「られ」と「し」の文法的意味と活用形を、それぞれ書け。

（11）⑧の「なはばかりそ」に使われている「な〜そ」は、どのような意味を表す言い方か。

（12）⑨「となむ、教へられし」の「なむ」の種類と、結びの語・活用形を書け。

（13）⑭「まじらではえあらず」の「で」の文法的な働きと、「え〜ず」の意味を書け。

C　指す内容・敬意の方向（14〜17）

(14) ⑥「これすなはちわが師の心にて」の「これ」は、どのようなことを指しているか。本文に即して書け。

(15) ⑦「常に教へられしは」の「られ」は、誰から誰への敬意を表しているか。

(16) ⑩「こはいと貴（たふと）き教へにて」の「こ」は、何を指しているか。

(17) ⑮「また人のことなるよき考へも」の「人」とは、どのような人のことか。

D　口語訳（18〜21）

(18) ⑧「のちによき考への出で来（き）たらむには、必ずしも師の説にたがふとて、なはばかりそ」を口語訳せよ。

(19) ⑫「さらに一人二人の力もて、ことごとくあきらめ尽くすべくもあらず」を口語訳せよ。

(20) ⑬をふくむ「また、よき人の説ならんからに、多くの中には、誤りもなどかなからむ」を口語訳せよ。

(21) ⑭をふくむ「必ずわろきこともまじらではえあらず」を口語訳せよ。

E　内容・記述（22〜25）

（22）⑥とあるが、師の説と違うことを言うのを「あるまじきこと」と思う人がいるのに、作者がそれを「わが師の心」だと言えるのはなぜか。

（23）⑩で作者は師の教えを「貴（たふと）き教へ」と言い、⑪で師の「すぐれ給へる」点の一つだとしている。作者がこの教えをそれほど高く評価するのはなぜか。

（24）⑮「また人のことなるよき考へも出で来（く）るわざなり」とあるが、第二段で作者が述べている学問の性質を、まとめて書け。

（25）⑥・⑮をふまえて、題の「師の説になづまざること」とはどういうことか。「なづむ」の意味を明らかにして書け。

F　文学史（本文全体をふまえて答える）（26〜28）

（26）この文章の出典『玉勝間』の作者名と、その人が三十年以上をかけて書き上げた『古事記』の注釈書の名を書け。

（27）作者の師である賀茂真淵は、おもにどの歌集の研究で知られているか。また、作者と真淵が松坂で一度だけ会ったできごとを何とよぶか。

（28）本居宣長が『源氏物語玉の小櫛（たまのおぐし）』などで、『源氏物語』の本質として説いた考え方を何というか。

【テスト直前チェック】この三つ　❶「教へられし」の「られ」は尊敬。⑦の動作は師（賀茂真淵）のもの。受身と取ると話がこわれる。敬意は作者（宣長）から師へ。**❷「な〜そ」は禁止、「などか〜む」は反語。**⑧「なはばかりそ」＝遠慮するな。⑬「などかなからむ」＝ないことがあろうか、いや、ある。**❸「なづむ」＝こだわる、「あきらむ」＝明らかにする。**題の意味は「師の説にこだわらないこと」。⑫を「あきらめる」と訳すと即アウト。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　▸ 解説記事にもどる